

宮本武蔵
目次

◎武士では無いぼうふり	1
◎倒れた者は打たぬ	6
◎百里二百里は嫌わぬ	13
◎是れは大切な路銀じゃ	17
◎一刀流の太刀風	21
◎頭が黒い虫は捻り潰すがよい	26
◎父祖伝来の二本の十手	31
◎見覚えのある印籠	37
◎強い〜若先生	43
◎信州第一の武芸家	50
◎水切りと柳切り	56
◎我輩は大先生だ	62
◎矢でも鉄砲でも受け止める	67
◎風変りな駕籠	73

◎ 心苦しい勝負……………	80
◎ 日本一と世界一……………	85
◎ 俄に飛び出した白い影……………	90
◎ 命の代りに片耳……………	96
◎ 二度吃驚り……………	104
◎ 三十人と三百人……………	109
◎ 拜まねば罰が当る……………	114
◎ 真面目な気違いが参った……………	120
◎ お蔭で肩の凝りが去った……………	126
◎ 自身の師匠を忘れたか……………	133
◎ 二刀流の奥儀は是れで御座る……………	137
◎ 剣術の立派な先生……………	142
◎ 蒸風呂の御馳走……………	147
◎ オ、まだ生きておる……………	152

◎横面をホカリ……………	156
◎話をすれば忽ち崇る……………	164
◎俄かに聞えた多くの人声……………	172
◎目付きの怪しい六十六部……………	179
◎是れは何うも意外……………	186
◎天狗の珠数繋ぎ……………	192
◎三通の誓文……………	199
◎秋葉山で二年の修業……………	203
◎久々で帰国……………	207
◎父の仇思い知れッ……………	210
立川文庫について……………	215
解説 加来耕三……………	217

宮本武蔵

◎武士では無いぼうふり

天下の政權は徳川家の手に歸して以來、其三代家光將軍の御代に至つて全く治り、弓は袋、太刀は鞘に納められて士は戦国の劍を捨て、壹に治世の武を修めんことに、心を勞むることになつたが、此頃、藩士の師弟、或いは武道熱心の士などが八寸の草鞋を穿つて諸國を順歴し、一流の師について、武を闘わす、所謂武者修業なるものが旺んに行なわれた。

茲豊前小倉の城下、小笠原家の家臣で、武道師範役、宮本武左衛門無二齋の門前へ或日訪ねて来たのは此の武者修業の一人である。身には紋付きの綿服に小倉の袴を裾高く着け、腰には朱鞘の大小を厳めしく、左りの肩から右の脇下へ風呂敷包みを斜めに結んで右手には六尺棒、左手には骨太の鉄扇を握り、両肩怒らして破鐘のような大声をたてた。「頼む、御頼み申す」と云う声に驚ろいた宮本の家來、直ちに飛び出して見ると此の有様でサモ傲慢らしく立つておる。「是れはく、何誰様にござりまする」「オー拙者は土佐の

国の浪人、神伝有馬流の棒の元祖有馬喜右衛門信賢と申すもの。予て宮本殿剣道御堪能の趣むき承わり居れば、此度当地へ参つたを幸い御手練の程拝見致し度く態々御尋ね致した。拙者の儀については、当今武道に志す者誰れ知らぬものも無い程でござれば、宮本殿にも定めて御存じの事と思う。何うか宜敷く御伝え下されたい」「ハッ、暫らく御待ちを願いまする」余りの言葉に呆れた家来、其儘奥へ通つて此の旨を武左衛門に伝えた。処が武左衛門には兩三日来の不快で出仕をさえ休んで居る程であるから仕合などは出来得べき筈が無い。「ナニ有馬喜右衛門……聞たことがあるように思うが中々慢心を致して居るようであるが望みによつて手合わせを致し手酷く懲しめてやるのは其者の為めではあるが、何分不快を以つて出仕をさえ怠つて居る昨今、万一其事が殿の御耳へ入つてもよくあるまいによつて程よく帰らすがよからう」「畏こまりました」と家来は再び玄関へ立ち出でた。「誠に御待せを致して相済みませぬ」「ム、何うした直ちに立ち合いを致されると申すか」「ハッ、其旨申し伝えましたる処、兩三日前より不快の為め臥し居りまする為め此度は残念ながら御言葉に應じかねまする」「ナニツ、不快の為め立ち合いはならぬと申されるか」「左様にござりまする」「ハ、ハ、ハ、ハ、不快とは何病でござるの。定めて拙者の名を耳にせ

られ俄かの発病と存ずるが……よくも左様な御心を以つて一藩の御師範役は勤まつたものでござるな。拙者国許では小倉の宮本無二斎と云えば武道の達人と承わつたに来て見れば存外の臆病武士。拙者の名を聞かれて俄かに不快になられるような御腕前なれば知れたもの。イヤ此上は強いて望むまい。万一御生命に別条あらはれては御気の毒。折角養生さつしやるよう伝えられい。……太平とは申せ御教導受けられる家中の方々は定めて御立派なものなられるであらう、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

口は横に裂けたりとは云え散々の悪口雑言を尽した後、臆て立ち去ろうとする折柄「一寸御待ち下されたい」と立ち出でたのは武左衛門の二子武蔵である。当年取つて十三歳。年から云えば未だ小供で取るには足らぬが性来の惻発者。殊に武道は五六歳の頃から熱心とあつて、父武左衛門の稽古ぶりを身覚え、窃かに木剣を取つて鍛練した結果其十歳の時は既に父の高弟に舌を捲かせ夫れ以後は武左衛門も親しく手を取つて教えて居るので今では小笠原の藩士中是れに打ち勝つ者は殆んど無い程であるから誰れ云うと無く小天狗の名をさえ称えられて居る腕前。此の武蔵、玄関脇の小座敷に居つて書見の最中、有馬が容易ならぬ悪口を聞き兼ねて思わず飛び出したものである。一時門前へ出て居つた喜右衛

門は此の声によって立ち止った。「何んだ、見れば小腕泊の分際で拙者に何か用があるか」「如何にも御意得たい儀がござるによって御呼びとめ致しました」「拙者の名を聞かれて御不快になられるような宮本殿御邸に御用がない筈。拙者は臆病武士の邸に、片時も足を止め申さぬ」「オ、其儀について御意得たい。宮本武左衛門は何が故に臆病武士でござる。不肖なれども武左衛門が一子武蔵、只今の御言葉伺うては聞き捨てになり申さぬ」「ハ、ハ、ハ、臆病武士の子息としては大胆なる言葉、感心。其心を以って成長致さねば誠の武士にはなれぬぞ。親父に見習わぬよう心掛けえ」「以つての外の御差図、先ず父臆病武士の理由を承まわろう」「申す迄も無いこと。武名高き拙者が仕合いを申し込みし為め俄かに病気を起されるようでは誠の武士ではござるまい。臆病武士と申したが何んと致す」「いよく思いも寄らざる御言葉。父の不快は本日俄かに発病いたしましたものではござらぬ。苟しくも一藩の師範役たる身が取るにも足らぬ子々武士に仕合を申込まれ、俄かに発病いたすようなことがあろう」「ナニツ、うぬ子供と思ひ容赦致せば拙者に対して子々武士と申したな」「耳があれば聞えた筈。棒を振つて立ち向えば棒振り武士、是れこそ立腹される筈はござるまい」「云わしておけば此奴勘弁相成らぬ……」「勘弁成らねば御

斟酌は御無用。何時なりとも打ち向われい、ぼうふり武士には父武左衛門が相手を致すまでも無い。小生で沢山「オー望みとあれば充分に打ち据えくれる。用意せい」「此方には望まぬが御望みとあれば御相手を致す。用意は致すまでも無い……しかし此処は玄関先きであれば父上に相済まぬ。町外れへ参れ」「其方左程の直言を吐いて真我が棒を受ける気か」「御相手は致すが棒は小生の身に御気の毒ながら当るまい。ともあれ門前へ出ろ」

云うが早いか一本の木剣を取り出して表へ飛び出したから、側に聞て居った家来の玄関番は驚ろいた。「モシ若様、夫んなことを成さつては親旦那様へ申し訳はございませぬ。万一御間違いがあつては何う遊ばす」と続いて後を追つかけると武蔵は一向平気なもの。「ナーニ心配致すな。此んな奴は以後の見せしめに充分懲らしてやるのじや。其方も後学の為めに見ておけ。さア棒振り、己れについてこい」と後をも見ずして駆け出すと、有馬喜右衛門は真ッ赤になつて怒つた。「無礼者ッ、いよ／＼容赦は相成らぬ。逃がすものか待てッ」と是れ又武蔵の後を追うて一目散に駆け出すと、纏て町外れの松原にかゝつた。

◎ 倒れた者は打たぬ

宮本の邸から松原まで道程は二十町ばかりもある。夫れを武蔵は一目散に駆け出した。後に続いて有馬喜右衛門。怒りは心頭に充ちておるから、逃がすまいと是れ又血眼となつて追つ駆ける。然し武蔵は小供の事で身も軽い上、常々屈強な身軀であるだけ二十町三十町の道を駆けた処が少しも苦にはならぬが、喜右衛門ははるく旅路を重ねた長途の疲労がある上、身には些少なながらも荷物を帯びておる。さらでも小供と駆け比べをしては及び兼ねる処へ此んな工合であるので松原へ着いた時は全身汗びたしとなつたのみか出す呼吸も急しゆう、身体はへトくとなつて倒れんばかり。先へ走つた武蔵、松の根方へ腰を掛けニタ／＼笑いながら此の体を見た。「何うじゃ棒振り苦しいか。太平の御世に生れて結構じゃ。僅か是ればかりの途を走つて苦しいようでは戦の時には、全く駄目であろうよ。何うせ棒振りなぞは敵を追つ駆けることはあるまい。追ッ駆けられるほうであろうから、其際は到底助かることが六ヶ敷かろう。併し今日の試合は暫らく待つてやる程に

充分息を入れい。私は夫人な死人同様の者は相手にいたさぬによつて……」「ダツ、黙れ、ナ、何も疲労は……ア苦……イヤ致しては居らぬ。殊に其方如き弱……弱輩者を相手に致すには……如何……に勞れたりとて何んでも無いこと。さア用意しろ」「何んのと口だけは達者なことを言われても其顔付きは何んじや。そんな者を相手にしては父上の御顔にかゝわるから、待つてやる」「ナ、生意気なことを……」

嘲弄半分武蔵の云う言葉に、身体は勞れきつてゐるが、憤怒の情押えかねた喜右衛門、息を休める間も無く持つたる棒を取り直し、武蔵の脳天目掛けて発止とはかり打ち下すと、早くも身を転した武蔵「そんな腰付きでは到底打つことは出来かねる。有馬流とやら

の棒は夫れでよいかは知らぬが犬一疋打つことは出来まい」「何をツ」といよく怒つて打ち込む棒の下を武蔵は彼方此方に受け流して居ること暫らく、聽て頃合を見計らつて持つたる木太刀に力をこめ、有馬の肩口強かに打ち込んだる勢い年少ながらも手練の手の内、流石強気の喜右衛門も思わずドーンと尻餅をついた。「ハ、ハ、ハ、棒振りの元祖、此の武蔵は倒れた者は打たぬぞ。夫れ幸いに休みたくば其まゝに休んでおれ」「其方如きを相手に……」と弱つた体を無理から起して再び打ち込もうとするを、少しの猶予も与え

ず、今度は右手の利腕を発止と打った。何分冴えた手先きを以つて甚たかに打たれたのであるから、口は達者であるけれども痺れは全身に廻つた喜右衛門、持つたる棒を思わずガリりと落したので、慌て、拾い取ろうとするが運悪くも落ちた棒は武蔵の足許に転がって居るので迂闊に手を出し兼ねて頗る慌て、居る。此の体を見た武蔵、又もや言葉を出した。「御斟酌御無用。ゆるりと御拾い下されえ」と云うのを聞いて、殆んど逆上せんばかりの有馬は遂に其激怒頂上に達したか、腰なる一刀に手が掛かつたと見る間も無く、大刀スリと抜いて言葉もかけず切りつけた。此時多少油断のあつた武蔵、アワヤ此の一刀で忽ち両断されたかと思の外、早くも身を開いて空を切らしたから有馬は力余つてコロコロと蹠跟たが、此隙に乗じた武蔵、「己れ卑怯者」と言葉の終るか終らぬ内、刃の半を木刀を以て。パツと払うと刀は有馬の手を離れて二三間彼方へ刎ね飛ばされ、是れはと呆れる間も無く続いて打ち下す第二の打ち込みは其横顔をイヤと云う程ポカーツと叩きつけた勢い、凄まじいとも何んとも云いようが無い。是れが為め其場へ眼眩んで打つ倒れた。

先程より兩人の戦いを後から駆けつけて恐るゝ見て居つた宮本の家来「若様、御身御無事で何より結構。最早相手が倒れましてござりますれば御早く御帰り遊ばせ」「オ、平

解説

加来耕三

(歴史家・作家)

我流の人・武蔵

——講談の宮本武蔵は、満喫いただけただけであらうか。

ところで、史実の武蔵だが、彼の本当のところの腕前はいかに——?!

昭和七年（一九三二）、講談から進化したともいえるべき大衆小説、その代表的時代小説の文壇を割って、直木三十五と菊池寛の大御所二人が、「たいしたことはなかった」、「いや、強かった」と、論争をくりひろげた。その余波として昭和十年から朝日新聞に掲載され、世に出たのが吉川英治の小説『宮本武蔵』だった。

もし、この名作が世に出ることがなければ、今日の武蔵の栄名はなかったかもしれない。日本人の多くが思い描く武蔵は、吉川版の宮本武蔵であり、そのヒロイン・お通さんおとも、本位伝ほんい又八またはちも、すべては作者の創作によるものであった。

だが、武蔵の著作と伝えられる『五輪書』や「独行道」、現在に伝承される遺書、遺品の数々は、この人物が確かに実在し、しかも尋常ならざる芸術の世界の人であったことを物語っていた。しかし一方で、この剣客ほど実像の知れない人物も珍しかった。だからこそ、講談・時代小説の主人公になれた、といえなくもないが。

出生の地も現在の岡山県、兵庫県に複数存在し、その家系も幾つか伝えられているものの、各々、決定的証拠に欠けている。とくに、同時代の物証に乏しい。

ただ、武蔵の家庭はあまり恵まれたものではなく、父母の仲も今一つ。武蔵の父は、その愛情をわが子に注ぐことのない人であった印象が強い。母が先に死んだか、あるいは再婚したかは別にしても、武蔵の幼少期は父母からの愛情に飢えた、屈折したものであったことはほぼ間違いないさそうだ。

「万事において、我に師匠なし」(『五輪書』)

と晩年いい切った武蔵だが、剣の初歩的な手ほどきは父からうけたものではあるまいか。

しかし、その剣は広くは兵法は、日本三大源流と呼ばれる中条流・陰流・神道流のいずれにも属さない、きわめて特異なものであったようだ。今日に伝えられる二天一流(二刀

宮本武蔵 [立川文庫セレクション]

2019年4月10日 初版第1刷印刷

2019年4月20日 初版第1刷発行

著 者 野花散人

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1809-2 2019 Nobana Sanjin, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。